

おじいさんは春先に野山に花を咲かせるのが仕事です。昔は灰をまいたりもします。ですが今はやめています。公園で準備をしていると、泣いている子を見つけました。おじいさんは少し早い白詰草の冠をプレゼントしました。その子はありがとうと笑います。公園は花でいっぱいになりました。

毎朝送られてくる白紙に、一枚ずつ言葉を載せていくのが俺の仕事だ。うまく表せない感情を代わりに伝えるのだ。ピンチで吊るして、何かか漂ってきたらさかさずその紙に固定する。できたら本来の宛先に送るのだ。不毛な仕事というなかれ。世界は俺のような裏方がいて回っているのだ。

指と指だけでじやれるだけではいつかは飽きる。そつと口に含んだ指先の、舌にふれるざらつき。誰もいないのを確かめると今度は互いの唇を貪る。夕方、坊つばい教室の隅、ズルして出る屋上、使われなくなった焼却炉の傍。居場所なんてどこにもなく、永遠に探してまわるしかないのだ。

これはタカシの席。こっちはキヨウコ。ここはアキノリとマサミ。みんなが来るのを待つ。植木鉢には水。プリントや絵が風にめくれる掲示板。早く来ないかな。いつまで一人なのかな。僕一人だけ歳をとって、仲間はずれになったみたいだ。もう元に戻る術はないのかな。

河の桜は側の向こう側の橋の改修工事で切り倒さされてしまいました。最後に残る一本は皆で咲き比べをしていた頃を懐かしく思い、今年も桜を咲かせています。葉桜になる頃、自分も切り倒されることを知りました。ですから今までで一番鮮やかな花を咲かせ、自らの命の終わりを惜むのでした。

模造紙を継ぎ足すように広げてきた僕たちの世界は、君が境界線を描いてからおかしくなった。消しゴムも修正テープも効かないその線は僕が足を踏み入れると酷く拒絶するのだった。

なんで入ってくるの。君の言葉で全てを知った僕は、この小さな世界にマッチで火をつけた。

おはようって指先で君の頭をうりうりやつて、振り向いた頬を両手でむにる。おーはーよーつてむにられたから二人でしばらくむにむにやつてたら、後ろから頭をはたかれた。「何やつてんだよ(笑)」。「朝のあいさつ」。三人で毎朝の音楽チエツク。貸して借りて歌って悶えて。そんな毎日。

パンをくわえてダッシュで家を出ることも、角で誰かとぶつかることもない。毎日は退屈だけと正しい。登校、授業、補習、下校、塾、宿題。隙間に好きなこと突っ込んで睡眠削って音楽聞いて。そうやって毎日を回して大人になるんだ。退屈を沈めて上澄みだけ後で思い出すことになったつても。

僕の手の中のケイタイからまっすくに伸びていく線が誰かとながつていたらしいな。そんなありきたりの言葉が簡単に出てくるくらいにはひどり。葉が簡単に落ちてくるくらいに薄っぺらな台詞もうまく刺されば誰かを捕まえられるのかな。空に放り投げるみたいにデタラメのアドレシにメーリングしてみた。元気でずか。

瞬間、涙が見えた。あれ。あとはみんな捨ててくから行くこうだなんて正気の高齢者の処分場に自分が答えるは変わらなかつた。と何度も念押しをしたが、本当にこれでいいの、

車で男を拾った。拾ったつつか、入れ物だけみたらいになつて、そのまま線路に飛び込み。そうだったから助けた。物騒かなと思っただけ。しかたない。コアとシャワーと布団。そのまま動かなくなつた。死んだと思つた。泣いてた。事情を聞かほんど親切にはなれない。

ホームから見える広告が昨日まで好きなものだった。今はなにもない。ケイタイは落し物と嘘をついて駅員に預けた。自分だとわかるものはない。これ自分でだ。とわかればそれはそれで吃驚するのだけけど。小さな子がぶつかつた。泣かないで。頭を撫でるとその子は笑った。初めでた。

財布とケイタイだけ持って出た。行く先もなにをも決めなかつた。駅の券売機で買える一番遠くまで買った。普通列車を乗り継いだ。不思議とお腹は空かない。はしゃぐ学生がいた。なんだか遠い世界の住人に見えた。着信は全部拒否した。メーリングも見てない。次の駅で全部捨てることにした。



君春にを思ふ

添嶋文庫



literary-accelitestar.jp

添嶋文庫
「春にして君を思ふ」
平成二六年五月五日初版
著者 添嶋讓
発行 空想少年は
子キスドレータの
夢を見るか?
言葉の工房
印刷